

## 1-2 シンポジウム開催報告

## 水都・江戸東京のグリーンインフラ ～東京五輪に向けて江戸から何を学ぶか～

日時 2017年7月11日 18:00～20:45  
場所 法政大学市ヶ谷地ボアソナードタワー26階スカイホール  
主催 法政大学エコ地域デザイン研究センター

### シンポジウムの開催概要

2017年7月11日(火)に、シンポジウム「水都・江戸東京のグリーンインフラ～東京五輪に向けて江戸から何を学ぶか～」を以下の概要で開催し、講師・パネラーを含めて、合計123名の方が参加されました(会場は法政大学ボアソナードタワー26階スカイホール)。

現在、東京はオリンピックに向けて様々なインフラが整備され、その姿を大きく変えようとしています。それらを、一過的なものとはせず、東京の未来遺産として位置付けていくためには、都市東京がこれまで育ててきた歴史的な文脈の中で位置づけていくことが求められます。本シンポジウムでは、本学がこれまで取り組んできた江戸東京研究の成果を活かしながら、歴史に学ぶことで、未来戦略としての日本型グリーンインフラについての議論を行いました。

当日は、岩佐明彦教授(デザイン工学部)の司会のもと、陣内秀信教授(デザイン工学部、エコ地域デザイン研究センター所長)の開会挨拶に続き、田中優子総長(社会学部教授)による江戸の自然・文化についての基調講演を頂きました。その後、神谷博氏(デザイン工学部兼任講師)、木下剛准教授(千葉大学園芸学部)、宮下清栄教授(デザイン工学部)より、グリーンインフラの最新動向について講演が行われ、最後のパネルディスカッションでは、水都・江戸東京に着想を得ることで広がる、グリーンインフラのさらなる可能性について、活発な議論が行われました。

次頁からその開催報告を記す。

- 18:00 趣旨説明：陣内秀信(法政大学建築学科教授)  
18:10 基調講演：「水都江戸の自然と文化」  
田中優子(法政大学総長)  
18:50 第一部 話題提供
- 1、「江戸東京のグリーンインフラと外濠・玉川上水の価値」  
神谷 博(法政大学建築学科兼任講師)
  - 2、「ロンドンのオリンピックレガシーとグリーンインフラ」  
木下 剛(千葉大園芸学部准教授)
  - 3、「武蔵野の生き物ネットワークとグリーンインフラ」  
宮下清栄(法政大学都市環境デザイン学科教授)
- 19:55 第二部 パネルディスカッション  
司会進行：岩佐明彦(法政大学建築学科教授)  
パネリスト：陣内秀信(法政大学建築学科教授)  
石神 隆(法政大学公共政策研究科教授)  
北山 恒(法政大学建築学科教授)  
高見公雄(法政大学都市環境デザイン学科教授)  
木下 剛(千葉大園芸学部准教授)

The poster features a large 'G' logo and the title 'シンポジウム 「水都・江戸東京のグリーンインフラ」 ～東京五輪に向けて江戸から何を学ぶか～'. It includes a detailed agenda, speaker list, and venue information. The background shows a cityscape with green spaces.

【日時】2017年7月11日 18:00～20:45  
【場所】法政大学市ヶ谷地ボアソナードタワー26階スカイホール  
【主催】法政大学エコ地域デザイン研究センター  
【問い合わせ】eco-history@mpu.ac.jp (電話・郵送)  
【参加費】無料  
定員123名(定員超過分は先着順) (定員1,000名)

## 基調講演 ～水都江戸の自然と文化～

田中優子（法政大学総長）

皆さまこんばんは。ようこそいらっしゃいました。今、法政大学はブランディング研究として江戸東京の過去、現在、未来を研究するということに踏み出しました。もう既に既存のように、これは新しく始まった研究というよりも、法政大学でも70年も継続されてきた研究と言って良いものです。それが今度、エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が出会い、そして、これを共にやっということになりました。

ブランディング事業といわれるこの研究には四つのプロジェクトがありまして、その一つは水都で、これは基礎構造を明らかにしようというものです。それから江戸東京のユニークさ、これはまさに江戸東京の水都としての自然だけでなく、水と緑の庭園として江戸が育ってきた中でのユニークさということでもあります。そしてテクノロジーとアート、江戸時代にロボットがあったということをご存じだと思いますが、このようなものが、ヨーロッパのさまざまな技術を取り入れながらも、それを自分たちの生活の足元の数だけ回転していく、編集していく、そのようなことをやっています。外からさまざまなものをもらいながら、その技術開発を自分たちの力にしていく、それが江戸時代の職人の力であり、これが日本の特性です。これを私たちは見つけ直さなければなりません。それまで、外から持ってきてそのまま売る、何もしないで売るということを長い間続けてきました。しかし、それでは何も育ちません。江戸時代はまさにその転換をしたのです。江戸時代というのは、それができなくなっていったという経済状況の中で、自らの技術を磨き、そのテクノロジーというものが広い意味でのアートにつながっていくという、日本のユニークさの一つをかたちづくりしました。そして、都市東京の近未来です。私たちは過去のことをやっているのですが、それはまさに未来のためにやっているわけです。東京にそれをどうやって活かすことができるのか、ということを考えながら、それぞれがそのように研究を行ってきました。これからそれがまさに必要と思っています。

きょうのお話の一つは、江戸とは湿地帯を埋め立てて開拓した、開発してきた都市であるということをお話したいと思います。水の江戸ということです。1457年頃の江戸の復元図を見てみましょう。水の上にいろいろな島が浮いていて、浅草などを見ても島です。それが後の江戸になるということ



が分かると思います。赤坂にはため池があります。地下鉄の駅名が残っていますが、そこには非常に大きなため池があって、その向こうのほうに江戸城があったわけです。江戸の中は、不忍池のような大きな池や湖、そして巨大によって構成されていた、まさに湿地帯だったわけです。

それがだんだん埋め立てられていきます。しかしそれでも、例えば日比谷などはすぐに海だったわけです。江戸城から見ても、あるいは霞が関辺りから見ても海が見えますし、江戸はそのように湿地帯を埋め立てて開発してきた都市であるということです。ですから、江戸の基本は水です。そして、単に水があるということではなく、水路のネットワークでつながっていたということです。川名登さんの『河岸』は、それがよく分かる、非常に良い本です。江戸時代には無数の河岸があったわけですが、これは現在の東京だけではなく、例えば川越のような所に川でつながっていました。その河岸を中心に、非常に緊密な川のネットワークができていて、それが江戸の内陸部にまでつながり、自然の川だけではなく、人工で造られた運河が相当たくさんできています。そしてそれがまた海につながっていくわけなので、この江戸はまさに水路の都であったということが分かります。

この『河岸』という本の中で、非常に面白いことが書いてあります。私は、この河岸や水路がなくなっていくのは明治維新以降だと思っていたのですが、そうではないということです。明治維新以降に蒸気船ができると、鉄道網と一緒にあって、ますます河岸はにぎわうということを知りました。このようなくだりがあります。河川水路を決定的に終わらせたのは、日本の高度経済成長の中で出てきた大型トラック輸送であると。これが内陸水路に最終的なとどめを刺した、という言葉があります。まさに前回の東京オリンピックのときです。そのような時期に、次々に水路が埋め立てられたというのは、確かに記憶に残っていることです。日本橋が高速道路に覆われたのもそのときでした。そのような東京の変化を、私たちは自然という観点からも捉えなければなりません。

広重が描いた名所江戸百景は、実は100枚ではなく、もっ

とたくさんあるのですが、その中で数えてみると、大体 80 パーセントに水が描かれています。これは海や運河、川、池などいろいろありますが、江戸の人にとって江戸は水の都市として考えられていた、そのように映っていたということです。しかも広重はこれを明治維新の直前に完成させるわけですから、失われるかもしれないと思いながら描いていたわけです。

名所江戸百景の一つの特徴ですけれども、川を描くときに、手前に一つ橋を描くと、向こう側にも必ず描いて、視点がこちらから向こうにずっと流れていくように、川を沿うように導いていきます。例えば、日本橋の絵は大変面白いもので、桶と縄があって、そこにカツオが見えます。そうすると、この辺に魚屋がいるという、私たちの想像力で情景を補うわけです。日本橋の側には魚河岸があります。そして、日本橋と江戸橋の方向は東側で、ここに太陽があります。ですから、太陽が出たばかりの時間に、魚屋が目の前をすごいスピードで通り過ぎたので、スナップが間に合わなくて、このようになってしまったというスピード感、動きを感じます。それから時間が分かる、季節が分かる、初ガツオの時期です。そのようなことが全て分かる、つまり自然と一緒に生きるということとはどのようなことなのか、季節と共に生きる、一日の中のある時間の中で生きて、そしてその時間と季節に動いている人、ものと一緒に生きていくことなのです。そのような生活感を表現しています。

次に、隅田川、両国の花火の景色を見てみますと、非常にたくさんの船が出ています。両国側は、葦簀張りの芝居小屋や寄席があったり食べ物屋があったり、そのようなお店がずらっと並んでいる場所です。対岸の駒形堂は浅草の中でも最も早くできた所だと思われていて、ここから浅草観音も出現したのです。黄金の観音がここで網に引っ掛かったので、それで浅草寺ができるわけです。浅草の発祥の地です。名所江戸百景を見てみますと、このときの情景には雨が降りそうな雲が見えます。このような自然観察には、ぼかしを多用して、雲の様子、空の様子を非常に綿密に描いていきます。これも、トリミングしてとてもおかしいのですが、人がいるのが分かるけれども、こちら側は見えていない、描かない、こちら側にどのような人がいるのかと想像しているわけです。赤い富士山が見えているから、これは夕暮れです。そして船はこちらからこちらへこいでいます。なぜなら、この人はこちらを向いているからです。サクラが散っています。季節と時間ときが全部見えます。

そして夜になります。山谷堀です。ここをずっと行くと遊郭、吉原が見えます。この両脇に料理屋があって、それを描いて

います。隅田川と向島の位置関係から、向島にきた芸者衆であるということが分かります。そして背景には、これは富士山ではなく、筑波山を見せる風景です。富士山と筑波山は一つのモニュメントになっています。江戸は建物をモニュメントにするということはありません。スカイツリーのようなモニュメントは作らない、そのような発想はせずに、常に富士山か筑波山を置いていきます。

川を中心にお話ししてきましたけれども、最後に神楽坂を見てみましょう。大名屋敷の中というのはやはり浮世絵には残らないのですが、ここにも自然感が見えますが。大名屋敷の表側の長屋には、防備も兼ねて下級武士たちがぎっしりとここに住んでいます、これの塀を越えて、向こう側には広大な庭園が展開しています。つまりこれは庭園で成り立つ大名屋敷であって、建物より庭園のほうが重要なのです。そのようなことは、外国人にも知られていまして、フォーチュンという人が『江戸と北京』という本を書いています、それで書いていたことを私はいつも思い出します。そこには、江戸だけではなく、少し郊外に出てみると、生け垣が丁寧に刈り込まれていて、手入れが行き届いていて、小屋や農家もこざっぱりと掃除されていて、植木を並べたり花を生けたりするという様子が見られる、ということを書いています。つまり、お金のある大名庭園だけではなく、農家であっても小さな町の中の家であっても、自分自身の範囲で自然をその中に取り入れて、常に手入れをしていたということが注目されています。運河も手入れをしないと持ちません。

つまり、自然を放置しておいて自然ですと言っているのが江戸の自然ではなく、手入れをして、工夫をして、次の代に残していくということをしなが、常に自然を変化させながら、管理しながら自然を守ってきたという歴史があるということです。グレーにはしない、グリーンを保ち続けるための技術というものを磨き続けてきた、それが植木屋だけではなく、そこに住むコミュニティーの人たちもそのような意識を持ってそれを行いつけてきました。単に何かを育てるだけではありません。江戸の人たちにとって、きれいにする、掃除する、清潔にしておく、そのようなことも大変重要なことでした。

ということで、江戸の町の水路を中心にしたネットワーク、それによってでき上がった手入れされた自然による庭園都市、またそれによって江戸の文化である芝居や遊郭、それを基にする文化につながってくるわけです。そのような文化もまた、江戸のインフラによってつくり上げられてきたということをお話ししたかったわけです。(了)

## パネルディスカッション①～話題提供～

陣内秀信（法政大学建築学科教授）

- ・江戸東京は水都といわれていたが、それは必ずしも下町、都心部だけではなく、外濠や神田川、さらには吉祥寺の井の頭公園の湧き水など、都市部、武蔵野、多摩、全て水のネットワークによる循環ができていくというのが特徴。
- ・東京全体が生活や文化と密接な関係にある水の都市である。そこに歴史エコ回廊という、ただ単にエコロジーとしての水だけではなく、精神性や文化、歴史を内包する。
- ・外濠や明治神宮の内苑、新宿御苑や迎賓館といった大名屋敷の跡地、さらに皇居そのもののネットワークはグリーンインフラの根幹である。
- ・椿山荘は大名庭園の跡であって、下には水神社が祀られている。このような所に文化性が伴ってくるのが東京の特徴。
- ・日本の水辺は本来とつながっている。神田川は人工的に掘った切り通しであるが、今や重要な都会のオアシス。
- ・東京の水辺には、分かりやすい水と緑の文化性や歴史がある。それをつないでいくと、上からの大きな都市計画でつくった軸線や象徴性はないかもしれないけれども、ものすごく面白いことになるのではないかな。

石神 隆（法政大学公共政策研究科教授）

- ・純公共空間の典型として寺社が重要。中小寺院がどんどん檀家が少なくなっているのだから、木の管理が難しい。学校も重要で、大学は意外と開かれているから緑が多い。
- ・今、東京の緑を供給している大きな存在のひとつは寺社の境内、それから学校。新宿区には、寺社と学校を中心に樹林のまとまりの数が結構ある。
- ・常圓寺という西新宿のお寺は、高層ビルの前に立地して一見グレーインフラであるが、前にはグリーンインフラがあって、その中には石やお墓がある。さらにそれを見ていくとまた緑が供えてあって、そのような寺院が中央にまとまっているのが東京の特徴。
- ・新宿区の大学では早稲田が一番多く約5万平米が樹林面積であるのに対し法政はほんのわずか。早稲田の隣は神社とお寺で、さらに民家も公道に張り出して緑があり、面白い純公共空間になっている。
- ・法政大学は、玉川流域全体の水循環の中にびたりと合う。市ヶ谷の外濠は玉川上水との関係があり、小金井も玉川上水、それから三鷹の法政高校にもこれはまた玉川上水、川崎の法政二高には多摩川からの二ヶ領用水がある。

北山 恒（法政大学建築学科教授）

- ・『江戸東京学事典』には、江戸は壮大な庭園を持つ武家屋敷や1000を超える寺社が、大小無数の庭園と森をつくり、疑いもなく世界史上最大の庭園都市であったとある。
- ・西洋の都市は、自然環境から人工的に切り取られた空間が都市で、自然は排除されている。これに対して東京は粒子状の都市であって、この粒と粒の間に私有地の緩衝地帯があるために、ヨーロッパとは異なるソリッドポイドの図が描ける。
- ・この粒状の都市は、26年ぐらいの勢いで建て替わっていくが、その隙間には庭木が生えて、そこに風が流れて光が落ちてくるといふ、外部空間と親和性の高い空間構成を持っている。
- ・ザハの国立競技場案に日本の建築家たちは反対運動を起こしたが、それはこの高さが70mもあるから。神宮外苑の木の高さをはるかに超える建物ができてしまうということ。
- ・隈さんの案は周りを緑でカバーしてあるけれども、基本的にはラッピングが変わっただけで、ボリュームは同じ。この競技場の50年後に建つ案として、槇さんが提案した競技場では、天がいがない、屋根がなく、いつもオープンに開かれた公園になっている。

高見公雄（法政大学都市環境デザイン学科教授）

- ・2050年の東京は、今と違って宇宙から見ると多摩川などの緑がきっちり伝搬して、そのような広域圏をつくるのだと、東京都が言っていたことがある。われわれは前世紀から壊れてしまった地域をマクロな目で見分けるようにつくり直す気持ちが必要で、そのような議論がグリーンインフラの議論の片端にはあるべき。
- ・玉川水系に落とし込んでいくと、その沿線の市街地は歴史エコ回廊のような市街地につくり直すことができ、そして外濠はきれいな水辺にするという脈絡でものを語っていききたい。
- ・前世紀は経済活動をするのに、足りないからといって税金でどんどん道路を造った。環境が足りないのであれば、やはり同じようなことをするという議論もあって良い。
- ・特に郊外住宅地で人が減っていくのであれば、一軒一軒が広く住めば良いというようなコンセプトもあり得る。宅地開発を、緑を増やす観点、グリーンインフラとして捉えていく。
- ・北海道の市街地整備では、川と鉄道と市街地を一体的に整備し、シームレスに市街地から川までつながっている空間を実現できている。縦割りのようなことを省き、そのようなものを目指す必要がある。

## パネルディスカッション② ～全体討論～

司会進行：岩佐 明彦（法政大学建築学科教授）

パネリスト：木下 剛（千葉大園芸学部准教授）

陣内 秀信、石神 隆、北山 恒、高見 公雄

A－ まずは、ロンドンオリンピックのレガシーから捉えたときに、東京オリンピックのレガシーがどのようにあるべきかという辺りのお話を、少し木下さんから話していただけませんか。

木下 私はお話の中で、ロンドンのグリーングリッドの計画をご紹介させていただいたのですが、エコシステムに基づく再開発、再整備という大きな文脈の中で位置付けられる骨太な構想、これが東京にぜひ欲しいと思います。そのときに、やはり都市の基礎にございます自然のシステムのようなものをしっかりと認識した上で、それを開発の中に取り込んでいくという視点が必要です。今、東京を見ていますと、それこそ競技場の問題など非常に小さなお話に集約されてしまっているような気がします。

A－ 骨太な構想というのは、もしかすると水都として脈々と東京がつくってきたものから位置付けられると感じます。東京ではどのようなことを提案していけば良いのか、神谷先生いかがでしょうか。

神谷 大きなスケールという話でいうと、エコ研ではこれまで首都圏全体を水圏として見るということをやってきました。その視点というのは、徳川家康が既にもっていた江戸づくりの視点です。家康は源流の環境保全から始めて、利根川を銚子に持っていったり、大きなスケールでやる。それに比べたら、今の計画は随分せせこましく、施設主義的なちまちまとした話になっています。きょうのような議論が必要で、それがまさにグリーンインフラだろうと思っています。

A－ ありがとうございます。何か補足や言い残したことがあれば、どなたからでもコメントをいただけたらと思います。

陣内 東京には隅田川川ネッサンスという構想がありましたが、今度のはベイエリアに競技場が集中しているので、初めての本格的な水の上のオリンピックになる。ロンドンも水を上手に生かしたわけですがけれども、もっと本格的に隅田川から連動したあの辺りを大いに活かし、水上交通も復活させるべきです。その絶好のチャンスだと思います。

それからもう一つ、大きなスケールという点で、イタリアで使っているテリトリーオという広域地域の考え方、これを日本にもっと取り入れたい。田中先生が最初のほうで『河岸』を強調した水辺ネットワークというお話をされましたが、われわれも銚子まで船で行ったことがあります。川越も栃木も



船でつながっていて、人の交流もあった。単なるベッドタウンではなくて、江戸と周辺が生き生きと結び付いて経済圏をかたちづけていた。そのようなものを、現代的な視点で、グリーンインフラでつなげていければ面白いと思います。

石神 僕は大学とお寺のお話をしましたが、なぜあそこに緑が残っているのかというと、要は非貨幣経済なのです。税金がかからない。レガシーには物理的なものがありますが、精神的なレガシーといえますか、日本人とグリーンの関係性、一種の風土的な関係性、世界に訴えることのできるこうした点こそがレガシーだと思います。それをできるのは大学で、大学はやはりオリンピックに対して発言力を持つ必要があると思います。場所と人間の関係性を考える、法政大学はまさにそのような先生が昔からたくさんいらっしゃいましたから。

北山 グリーンインフラという公共がやるように見えてしまうのですが、どうも日本の場合もう少し小さい組織、公私ではない、その間にあるコモنزなど、皆がやっていくような小さいインフラの集合、そのような新しい形式でやるのが良いのではないかと思います。もっと自発的に集合としての自然体系に目をむける必要があります。それはヨーロッパの自然に対抗する原理として都市があるのとは違い、江戸東京は自然を包括する都市であったということが重要なヒントではないかと思っております。

高見 今、政府のやっている事業は、緑を貼り付けて、あとは民間でやってくれというようなもので、非常に断片的だと感じます。私が申し上げたいのは、下が大いに盛り上がっている現代なのだから、広域的な役割を果たすべき皆さん（政府）がもう少し覚悟を決めて、そろそろ何かやるということぐらいは言ってほしい、そのようなことを思いました。

A－ 今日は、グリーンインフラという視点から見ると、まだまだいろいろな夢があるなという気がしました。この議論はこれで終わりにせず、今後も継続的に続けていければと思います。（了）